
永遠の愛

渡辺之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の愛

【Zコード】

Z9527C

【作者名】

渡辺之介

【あらすじ】

一命を取り留めた光輝。自分の気持ちを瞳に打ち明ける……

出念い……そして（前書き）

未熟者ですが御観覧下さい。

出会い…そして

僕の名は、中条 光輝（なかじょう ひづき）。

これといった趣味も特技もなく、頭もけして良いわけでもなく、ただ何となく今まで生きてきた。女人を好きになつたことだつてなかつた。

そんなある夏の日、友達の達也たつやと芳樹よしきと夏祭りにいつた。

「それにしても、すごい人の数だな！」
「なかなか前に進めねえ！！」

しごれを切らした芳樹は素早い身のこなしで前にすすんで行く。

僕らもそれについていつた。

しかし、なかなか追い付かない。

「芳樹！早すぎる！！」

「きやつ！」

「イテツ！！」

僕は誰かにぶつかり、転ばせてしまった。

しかし、芳樹を見失うと困るので、僕はろくに謝りもせずにその場から芳樹を追いかけた。

ぶつかったのは女人だった。

綺麗な黒髪、小麦色の肌、つぶらな瞳……。

とても可愛かった。

そして、ようやく僕と達也は芳樹に追いつき、二人でバカ騒ぎして一日が終わった。

夏祭りの日から何週間かが過ぎ、まだあの出来事を考えていた。

そう…僕は、あの女の人に一日惚れをしてしまったのだ。

そしてそれは、僕の初恋でもあった。

夏の終わり頃のある日、達也と芳樹とファミレスに飯を食べに行つた。

するとその店には…

あの女の人がバイトしていた。

「い）注文はお決まりでしょ？」

「い）の前はい）めんなさい！…！」

僕の口はかつてに謝ってしまった。

覚えてる訳ないのに…

「大丈夫です。気にしてくれてありがとうございます。」

僕は驚いた。彼女は僕のことを覚えていたのだ。

ふと彼女の名札を見ると、五十嵐（いがらし）ひとみ（）と書いていた。

その日以来ほぼ毎日そのファミレスに飯を食べに行った。
彼女に会うために

そのうち僕は彼女と仲良くなり、メールアドレスを交換するまで友好を深めた。

「今度の日曜日暇だったら遊園地に行こう
僕は緊張しながらメールの送信ボタンを押した。

返信は思っていたより早かった。

「いいよ。日曜日はバイトも休みだし」

僕は嬉しくて一人でニヤついていた。

「じゃあ1時に公園に待ち合わせでいい?」

「もちろんOK。」

返信がきた時、僕は嬉しくて、嬉しくてたまらなかつた。
生まれて初めてデートに誘えた。

そして、デート当日を迎えた。

待ち合わせ時間の15分前に僕は公園に着いた。
瞳はもう来ていた。

「早いな!」

「楽しみにしてたから早く来ちゃった。」

そんな会話をして僕たちは遊園地まで歩いた。

遊園地に着いたら

ジェットコースター

メリーゴーランド

コーヒーカップ

…

色々な乗り物に乗った。

中でも思いでに残っているのは 観覧車。

僕は高いところが苦手だった。しかし、乗れないのは格好

悪いので我慢して乗った。

隣ではしゃぐ瞳が相変わらず可愛かった。

瞳に見とれいたら怖い気持ちも忘れていた。

「私の顔に何かついてるの？」

「いや、別に……」

僕は恥ずかしくなった。顔が赤くなっているのも気付いた。

“今日、『好き』って云えよつ

”そう思つた。ただ見ていろだけだと辛いことが分かつたから…

遊園地の帰り、僕は告白のタイミングを伺いながら、緊張して歩いていた。

「今日は楽しかった！また来ようね

「うん。そうだね」

遊園地からすぐ待ち合わせた公園に着いた。

「今日はありがと……じゃあまたね
「い、家まで送るよー」 「いいよ。そんなに気遣わなくて
「いいつて。一人だと危ないだろ」
「わかった。じゃあちゃんと私のこと守つてよー」 「まか
せとけつて」

僕は瞳を家まで送った。

「じゃあ、またね」
「じゃあな！！」

僕は瞳に“好き”と伝えられなかつた。

悔しさと刹那さの入り交じつた気持ちになつた。

僕は一人、家へ向かつて歩いていた。

バン！！！

「大丈夫ですか？大丈夫ですか？きゅ、救急車をよばないとー！」

僕は車に引かれて意識を失つた。

間もなく救急車に運ばれ近くの病院に搬送された。

再会（前書き）

あまり自信はあつませんが、どうぞご覧ください。

再会

“ここは何処だ？あつちで手を振ってる人がいる。誰だろ？”

「頭を強く打っていますが、幸い呼吸はしますし、心臓も動いています。」 医師が光輝の両親に丁寧に今の状態を説明している。

「ただ…意識がないので…まだ安心はできません」
光輝の両親は納得出来ていらない様子だ。

「う、う、家の子は、だ、大丈夫なんですよね？」た、助かりますよね？」

光輝の父親はとても心配そうに医師に聞き返している。
母親は言葉を失い…ただ、ただ泣くばかりであった。

“こっちに向かって走ってくる。でも…一体誰だらう？”

ブーブー ブーブー …

光輝の携帯電話が震え出した。

少しためらい光輝の父が手に取った。

「もしもし」

「あ、もしもし…あれ？光輝じゃない」

「私は光輝の父だ。今取り込み中だから…またかけ直してくれ

ないか？」

「はい。わかりました。失礼します」

光輝どうしたのかな？

まさか、事故？

そんな訳無いか…

瞳は少し不安になつた。

“あつ。隣に座つた。綺麗な黒い髪に隠れて顔が見えない。本当に誰なんだ？”

「電話だれだつた？」

光輝の母は震えた声で父に聞いた。少し沈黙が続き、父が口を開いた。

「光輝には彼女がいるのか？」

「え？」

光輝の母は驚いた。

「だとしたら…光輝が交通事故で意識を失つていふこと…伝えた方がいいよな？」

ブーブー ブーブー …

また光輝の携帯電話が震え出した。

今度は母が電話に出た。

「もしもし」

「光輝の彼女の瞳といいます。不安になつてかけ直してしまいました。」

「やつぱりそだつたのね。光輝には彼女がいたのね。」

母は父に受話器を渡した

「光輝は今病院にいる。交通事故で意識を失つたんだ。
頼む！光輝のために病院に来てくれないか？」

光輝の父は瞳に必死の思いで頼み込んだ。

「今すぐ行きます！」

私は信じられなかつた…次第に冷静さをなくし…

涙がこぼれ落ちそうになつた。

「早く行かなきゃ…」

私は涙を必死にこらえて病院まで走つた。

死なないで…

“その女の人は、小麦色の手でぎゅっと僕の手を握つた。そして、何かつぶやいた。

聞き取れない。お前は一体誰なんだ。”

私はやつと病院の光輝の部屋にたどり着いた。

「こ、光輝～！」

私は人目も一切気にせず光輝の側に寄つた。

「光輝の側で手握つてやんな」

光輝の父はそう言つて、母を連れて部屋を出た。

「ごめん！光輝、本当にごめん。私のこと、家まで送らなければ…」

“もう一度女の人の顔を見た。つぶらな瞳から…涙がこぼれる。瞳？”

その瞬間……

僕は永い眠りから覚めた気がした。

瞳が僕の手を強く握つて、泣いていた。

「泣くなよ

「…え？」

「だから泣くなつて」

「ご、光輝！」

私は幻を見ていると思つた。

でも、そこにいるのは紛れも無く私の愛する人。光輝だった。

「もう一、心配したじやない！」

「ごめん。ごめん。」

「本当に心配したんだから～
瞳はまた泣き出した。

僕は瞳を、ぎゅっと抱きしめた。

もう一度と離れなこみひこ
離さなこよう

咲田（さきた）

第三話題です。もう少しあお願いしますかー。

この前…

私、光輝のお父さんに“彼女”って言つちやつた。

いつの間にか、“彼女”のつもりになつてたんだ…

でも、二人は付き合つてるわけじゃないんだ。

今度、光輝に自分の気持ちを話さう。

けじめをつけなきや…

“好き”って伝えよう

あの日から一週間

光輝は退院の日を迎えた。

病院を出て、迎えに来た父さんの車に乗り込んだ。

「無事に退院できてよかつたな

「うん」

沈黙が流れた。

すると、父さんが沈黙を破つた。

「瞳ちゃんだったかな？あの娘とは、どうなんだ？」

「別に…なんでもない」

また沈黙が流れた。

「まあ、大事にしろよ」 「…………」

午後6時
家に着いた。

台所では母さんが忙しそうに夕飯を作っていた。

「おかげで。今日は退院記念で、光輝の好きなカボチャコロッケだよー」

「マジでー！ ありがとう」
そういって、光輝は2階の自分の部屋に行つた。

携帯電話を手に取ると、受信BOXに瞳からメールが届いていた。

〔退院おめでとう〕

光輝はメールを見るなりすぐに返信した。

〔ありがとうございます。話があるんだ。明日、会える？〕

〔この時、決心した。〕

明日、瞳に自分の気持ちを打ち明けようと…。

瞳からメールが返ってきた。

〔会えるよーーじゃあ、いつもの公園にー時ね。〕

「わかった。じゃあ明日ねー…」

と、メールを返した。

僕は気持ちが高ぶった。

午後7時

家族と夕飯を食べた。

父さん、母さんといろんな話をした。

でも、どの話も記憶に残らない…

今は、明日の…

瞳のことで頭がいっぱいだ。

それから、風呂にまつって、音楽を聞いて、TVを見て…

でも、やっぱり何をしていても上の空だった。

午後11時

布団に入った。

それから何時間も瞳のことを考えていた。

結局、実際に寝たのは、3時過ぎだった。

朝、10時に起きて、軽い朝食をとった。

そのあと、ゲームをして、音楽を聞いた。

1時間半くらいがたつた。

12時

昼食は力ヶツラーメンを食べた。

しつかり歯を磨き、ガムを噛みながら家を出た。

20分歩いて、光輝が先に公園に着いた。
ブランコに座り、瞳を待っていた。

5分くらいして、瞳が来た。

「ごめん！遅れちゃつた」

「余裕！まだ、1時になつてないし

『あのや』
同じタイミングで声が出た。

「今日は俺が話題で呼んだから、俺が話すよ。」

そういうて、光輝は話し始めた。

「俺、夏祭りで瞳にぶつかっちゃったじやん？その時からずっと気になつて……」

「それでどんどん気持ちが大きくなつていつたんだ。」

光輝は少し間を空けて、
叫んだ。

「俺は世界で一番瞳が好きだあ～」「
俺と付き合つてくれえ～」

私は嬉しかつた。

光輝も同じ気持ちでいてくれたことが

「私も光輝が好き……てかびっくりした。私が言おうと思つてたのに~」

「今日からまたよろしくねーー！」

光輝は何も言わずに抱きしめた。

強いけど、とっても優しくて……温かつた。

温もりを感じた。

それから、体を離して、二人は手を握った。

「今から暇?」

「暇だよーーどつか行こーーーー！」

「じゃあまた遊園地行くか?」

「うん。行きたい！」

そう言って、二人は歩き出した。

この時はまだ、どんな未来がおとずれるかもしらぬ、ただ無邪気に笑っていた……

一転…（前書き）

クライマックスが近づいてきました。見てもらえば嬉しいです。

一転：

二人が付き合い始めて、一ヶ月くらいがたち。街は雪がヒラリヒラリと舞降る季節になつた。

街はクリスマスマームードで一年のどんな行事よりも盛り上がっている
ように思えた。

クリスマスの日は、一人で一緒に過ごした。
互いの親も二人の関係を知つている。

そして、今年も残すところあと数時間。
二人で一緒に年を越す約束をしていた。

もちろん、二人が始まつたあの公園で待ち合わせをしている。

午後11時

約束の時間になつた。

僕は夏に買い置きしていた花火を持って家を出た。

「おまたせ～」

「おせいよ～。自分から誘つたくせにーー！」

瞳は少しそうへを膨らませて言った。

「「めん。」めん。これ持つてきたから許してー！」

僕はそう言つて花火を出した。

「わあ～。年越し花火とか面白そうじやん
「だろ？」

僕は花火の袋を少し乱暴に開け始めた。

「でも、しけつてたりしてね…」

瞳の言葉は的中した。

花火に火をつけようとしても全くつく気配がない。

「瞳が変なことゆうからだよ」
「まあ、いいじゃん。しかたない。雪で遊ぼー！」

瞳は無邪気な笑顔で言った。

今年の冬は暖冬で雪がない。でも、元々雪が多い地方なので、公園には雪が積もっている。

バン

瞳は僕におもにつきり雪玉を投げた。僕は反撃して、一人で転がつたり、雪を掛け合つて……

気が付けば一人とも雪まみれになつていた。

すると、

ボーン ボーン

除夜の鐘が鳴り出した。

こいつで、一人で新しい年を迎えた。

それと同時に永遠を微かにだけ感じることができた。

「じゃあそろそろ行くか
「そだね」

今から神社に初詣に行く。

「神社行つたら、おさい錢して、おみくじひいて……こいつしな
くちや」

「こいつらつて、一つしかないじやん」

そんな会話をしながら歩いていると、神社に着いた。

「じゃあ、おさい錢しよう」

「うそ」

カラソ カラン

「瞳、なに願つた?」

「光輝とずっと一緒にいられますようにって」

「心配すんな。ずっと一緒にいるから」

「じゃあ私のこと、どんな時でも守つてよ」

「おひ。当たり前だろー!」

携帯をふと見ると

午前0時48分。

そろそろ帰んないと瞳の父さんによられるな……

「瞳、そろそろ帰るぞ」 「もう少し一緒に居たいのこなあ」

「駄目だつて怒られるの俺なんだから……」

「そだね。じゃあ今田は帰るつ」

そして、帰ろうと手を繋げようとした時。
急に瞳が倒れた。

「ひ、瞳?おい、瞳?大丈夫か?」

「.....」

「おい、瞳ー瞳ー！」

「.....」

いくら叫んでも返事がない。

そして、誰が呼んでくれたか分からぬが、救急車が来て瞳を乗せた。

僕は救急車に乗り込み、必死に叫んだ。

「瞳ー！ 瞳ー！ 瞳ー！」

つて何回も叫んだ。

なんで?

なんで返事しないの?

疲れて寝たのかな？

「落ち着いてください！助かるように全力を尽します。」

と、救急車に乗ってる人が言った。

助かるように全力を尽くす？

何言つてんだこの人

瞳は寝てるだけなのに……

僕は今起きている状況を理解していた。

頭をよぎる嫌な予感。

· · · · ·

瞳。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9527c/>

永遠の愛

2010年10月11日04時39分発行